

小池 宏明 牧師

創世記 1 章 1 節は印象的な書き出しである。「はじめに神が天と地を創造された。」

主なる神様は「光、あれ。」と御ことばを発して、御ことばのごとくに「光」を創られた。そして、私たちが、今見ているような自然界が、神様が発せられる「ことば」によって、神様の設計によって、創り出された。私は自然界の調和の取れた美しさに、創り主の熱意を感じる。

*神と人との密接な関係

人は神のかたちとして創られた。人間が神のかたち、神の似姿として創造されたということは、人間は靈的な存在として創り出された、という意味である。他の生物と人間は根本的に違うのだ。人間が第六日の最後に創り出されたのは、主なる神様が人間を特別な愛の対象として創ったからである。人間に必要なすべての環境を整えてから人間を創り出したのである。こうして、ジグソーパズルの最後のワンピースをはめ込むように人間が創り出され、正しく管理するために、人間は自然界の頂点に据えられた。

*祝福を受けるための安息

「第七日」に注目する。2 章 1—3 節を読んでみよう。神がこの日を祝福し、聖別されるために安息したのである。第七日は安息、祝福、聖別の一日なのだ。

創世記は、あのエジプトからイスラエル民を導き出した「モーセ」がまとめた書物である。エジプトを出て荒野を旅するイスラエルの民も、この創世記をモーセから聴いていたはずだ。イスラエルの民は、「十戒」とのつながりを意識して、この天地創造の「第七日」の所を聴いたことだろう。(出エジプト 20 章 8—11 節)

主なる神様は、第七日、安息日の一日を祝福した。「一日」を祝福するとは、その一日に生活する人が、何らかの特別な益を受けるようにする、ということである。神様は、創造のわざを止めて、もっぱら人の益のためにだけ一日中費やすために取り分けた。これもまた、驚くべきことだ。安息日は人のためにあるのだ。一日で大空を張られた神様、一日で海も陸も創られた神様、一日で魚も鳥も創られた神様、一日で獣も人も創造された神様、まことに力ある神様が、同じ一日を割いて、人に益をもたらそうと身構えていてくださる。神のかたち、神の代理人、全被造世界の管理者である人間に、一日がかりの祝福を与えることなしに、全世界は「完成した」と宣言することができない。ジグソーパズルに最後のワンピースである人間が創造されて、はめ込まれて、大満足した神様は、その世界というパズルに立派な額縁を付けて下さったようなものだ。人間を祝福するために全力を注いで、フィニッシュを迎えた。主の御わざは、創造のわざから祝福のわざに転じて完了したのだ。

このような、主なる神様の溢れるばかりのご愛に気付いた時、私たちはこの一日をどのような態度で迎えるべきか、自ずと見えてくるだろう。十戒の安息日規定は窮屈な決まり事ではない。私たちがまた、神のかたちとして、神様に特別に愛されて、神様と靈的に交流できる者として創り出されたのだから、七日目を聖別して、つまり取り分けて、普段の生活から切り離して、真正面から主なる神様に向き合いたい。